法務省“社会を明るくする運動”中央推進委員会主催
第７２回“社会を明るくする運動”作文コンテスト

つながりを感じられる社会に

和歌山県・橋本市立高野口小学校・六年
和田（わだ）　希良々（きらら）

私は、夏休みに一さつの詩集を読みました。その詩集は奈良少年刑務所に収容されている少年達が書いた詩です。私は少年刑務所があることをその時初めて知りました。

少年達が書いた詩は、どの詩も今の自分の気持ちを素直に表現していて、過去に犯したあやまちを反省する詩や親に対する感謝の気持ちを書いた詩もありました。

私は、なぜこんな素直な心を持った少年達が犯罪や非行をしたのか不思議に思いました。詩を書くことで少年達の立ち直りを目指すプログラムの中で、ある日「ぞうさん」を題材にした授業で、みんな歌い始めたのに、歌わない少年がいました。なぜなら「ぞうさん」の歌を知らないまま育ってきたからです。彼は、幼稚園も、小学校も行っていないそうです。私は、どんなにきびしい環境で育ってきたのだろうと、とても悲しい気持ちになりました。

犯罪は決して許されるものではないけれど、少年達の育ってきた環境がもう少し違っていたら、犯罪を犯していなかったかもしれません。少年達は、自分の詩を授業の中で発表し、共感してもらったり、認められることによって自信を持ち、立ち直っていきます。困った時に相談に乗ってくれたり、うれしい時に一緒に笑ってくれたり、悲しい時に一緒に泣いてくれる、少年達の周りにもしそんな人たちがいてくれたらどんなに幸せで心強かっただろうか。私は、家族や友達などたくさんの人たちに支えられています。これは当たり前のことではなくてとても幸せなことなのだと改めて思いました。

人と人とのつながりが薄れたり、無関心が孤独を招き、犯罪につながるならば、少年達は社会の中では被害者なのかもしれない。そうならないためにも「つながり」のある社会をつくることはとても大事だと思います。

少年達を立ち直らせるために大事なことは、彼ら自身が変わることともう一つは、少年刑務所の門を出た後、彼らを温かく受け入れてくれる社会があることです。

「自分は大切な一人」だと思い、「つながり」を感じられる社会を作ることを、一人ひとりが自覚し、大きな輪となって広がっていくことを私は願います。